

研究論文

日本学生と韓国学生の役割に伴う作業に関する探索的検討—文化の観点から—

山根 伸吾¹⁾, 李 京珉²⁾, 池 石蓮³⁾, 盧 鍾秀⁴⁾, 花岡 秀明¹⁾

1) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院, 2) 極東大学, 3) SISO 感覚統合相談研究所, 4) 大田保健大学

要旨：日本学生 34 名と韓国学生 42 名を対象に、自身の活動と役割に関するアンケート調査を行い、作業の枠組みから共通する部分と異なる部分を見出し、文化の観点から説明が可能であるか検討した。調査では、自身の役割とそれに伴う活動の組合せを挙げさせ、それは願望的作業か、また義務的作業かを尋ねた。そして、その作業による健康生活への影響、作業に伴う自分らしさ、感情を尋ねた。分析により、両学生とも願望的作業は健康生活と自分らしさに関連していた。願望的かつ義務的作業は、韓国学生は日本学生に比べ有意 ($p<0.05$) に自分らしさを感じていた。韓国学生が、願望的かつ義務的作業に対して肯定的感情を示した一方で、日本学生は、否定的感情と肯定的感情、否定的感情を受容という組み合わせた感情を示していた。文化は、作業への個人的な認識と感情に影響すると考えられ、特に、願望的かつ義務的作業において影響する可能性が示唆された。

作業科学研究, 8, 24-32, 2014.

キーワード：文化, 作業, 役割

Research Article

Exploratory study from the perspective of culture on the occupation associated with the role of students in Japan and South Korea

Shingo YAMANE¹⁾, Kyoungmin LEE²⁾, Seokyeon JI³⁾, Jongsu NOH⁴⁾, Hideaki HANAOKA¹⁾

1) Institute of Biomedical & Health Sciences, Hiroshima University, 2) Far East University,
3) Sensory Integration toward Social and Occupational Being, 4) Daejeon Health Sciences College

A questionnaire survey was conducted on the personal activities and roles of 34 Japanese and 42 Korean students. Similarities and differences within an occupational framework were highlighted in an attempt to determine the role of culture as an explanation. The questionnaire first asked participants to list their own roles and the associated assemblage of activities and then asked if these were desired or obligatory occupations. Following this, the survey asked about the influence of the occupations on healthy lifestyles, jibun-rashisa (sense of self) and feelings. The analysis found that desired occupations were connected with healthy lifestyles and sense of self in both groups of students. Both desired and obligatory occupations were significantly ($p<0.05$) associated with sense of self in the Korean compared to the Japanese students. The Korean students displayed positive feelings towards both desired and obligatory occupations whereas the Japanese students showed a mixture of negative and positive and negative feelings. Culture can be considered to influence individual understandings and feelings about occupation and it was shown that culture probably has an impact on the relationship between desired and obligatory occupations.

Japanese Journal of Occupational Science, 8, 24-32, 2014.

Key words: culture, occupation, role

はじめに

文化の定義は諸家のものがあるが、Tylor (2010) の「社会の成員として人間によって獲得された知識、信条、芸術、法、道徳、慣習や、他のいろいろな能力や習性を含む複雑な総体である」が広く知られている。この定義は、文化は人間の多様な営みを総体として捉えるべき概念であることを示しているが、概念の広範さゆえに、捉え難さも指摘されている。

作業と文化に関する研究は幾つか散見されるが、日本における作業科学研究で文化を扱った研究は少ない。中村ら (2000) は、日本とカナダの高齢者の興味ある活動について調査を行い、仲間との関係によって興味が影響を受け、モチベーション低下や参加頻度が社会環境的要因により影響される日本文化について述べている。また、Kondo (2004) は、日本と米国の文化の違いを述べ、普遍的な作業療法理論と同様に、文化特有の作業療法理論の実証が作業療法に必要と述べている。

このように、先行研究から文化と作業の関連が示唆されており、クライアントの作業は、クライアント固有である一方で、環境に位置付けられる文化からも影響を受けることはコンセンサスが得られていると考えるが、十分な研究が行われていないのが現状である。

筆者は自身の海外への滞在の経験を通して、特に作業と関連した役割の認識や感情には、文化からの影響が大きいのではないかと考えた。しかしながら、このような観点での先行研究は見られなかった。個人の作業と役割への認識や感情に文化が影響してことが明らかになれば、作業療法士がクライアントの文化の影響を考慮して作業に関わる重要性を明確に示せると考えた。

そこで、本研究では、探索的に日本と韓国の学生に対して自身の作業と役割に関するアンケート調査を行い、その認識と感情に関する両者の異同を確認し、文化の観点から説明が可能であるか検討することを目的とした。本研究の意義は、作業と役割への認識や感情に関して、文化によって差異があるかどうかを明らかにすることである。本研究では、文化をある集団や社会によって形づけられる信念と認識、価値と基準、慣習と行動 (Kielhofner, 2012) と定義して行った。

方法

1. 対象者

日本の A 大学作業療法学専攻学生 (以下、日本学生) と、韓国の B 大学作業療法学専攻学生 (以下、韓国学生) から対象者を募集した。日本学生 34 名 (男性 5 名、女性 29 名)、韓国学生 42 名 (男性 7 名、女性 35 名) から回答

を得た。学生は、臨床実習開始までに学ぶカリキュラムを終了していた。なお、調査時期は日本学生については、2011 年 1 月、韓国学生については 2012 年 5 月であり、いずれも試験期間が近づいてきた時期であった。

2. 調査方法

研究同意の得られた学生に対し、アンケート調査を行った。まず、対象者に自身の主な役割と、その役割に伴う活動の組合せを 5 つまで想起させ、記入させた。吉川ら (2000) は、人は役割をもつことにより、すべき作業が決まり、所属する集団から認められ、習慣化した作業によって生活が組織化され、適応が促進されると述べている。つまり、役割と活動には関連があり、役割により具体的な活動の枠組みが与えられると考えられる。本研究では、活動と役割の組合せで具体的に想起させることで、後述の質問項目への妥当な回答が期待でき、かつ作業療法の考え方に沿っていると判断し、この方法を用いた。

役割については「日々の生活の中で、様々な役割があると思います。家族、地域、文化活動、友人、その他、広い範囲でお考え下さい」と説明し、例として Oakley ら (1986) の役割チェックリストの項目 (学生や生徒、勤労者、ボランティア、養育者、家庭維持者、友人、家族の一員、宗教への参加者、趣味人や愛好家、組織への参加者) を示した上で、その他の役割を挙げて良いと伝えた。また、ある一つの役割につき、複数の活動の組み合わせを想起した場合は、それらの組合せを挙げて良いと伝えた。

次に、対象者が挙げた活動について、その認識と感情を調査するため、作業の枠組みから質問をした。その質問項目は、吉川ら (2009) の作業の意味を考えるための枠組みを参考とし、回答が期待できる量と内容とするために項目を絞り「社会の中での意味」「自身との関連」「健康との関連」「作業が引き起こす感情」を選択した。まず、「社会の中での意味」として、その活動はやりたい活動か否か、やらなければならない活動か否かを尋ねた。そして「自身との関連」として、その活動を行う際の自分らしさを感じる程度を 4 件法で尋ね、「健康との関連」として、その活動を行うことが健康的な生活に影響している程度を 4 件法で尋ねた。最後に「作業が引き起こす感情」として、その活動を行う際の感情を自由回答形式で尋ねた。

韓国でのアンケートでは、韓国語を母国語とする作業療法士が翻訳を行い、アンケート説明も韓国語で実施した。

3. 分析方法

- 1) 記述統計を行い、データの整理と確認を行った。その際、挙げられた活動内容が多岐に渡っていたため、活動と役割の組み合わせの内容を確認したうえでデータを類別し、役割カテゴリーとして集約した。なお、全てのデータがやりたい活動か、やらなければならない活動であったと見なせた。即ち、やりたい活動ではなく、かつ、やらなくてはならない活動でもないデータは見られなかった。そのため、今回得られたデータの活動は、回答者にとって何らかの意味を有していたと判断し、ここからは活動ではなく、作業という用語を用いることとした。つまり、やりたい活動を以下、願望的作業と述べ、やらなくてはならない活動を義務的作業と述べる。
- 2) データを願望的作業であるか非願望的作業であるか、そして義務的作業であるか非義務的作業であるか、役割カテゴリーごとに集計した。また、更に願望的かつ義務的作業、願望的かつ非義務的作業、義務的かつ非願望的作業に類別して集計し、データの概要を確認した。
- 3) 国別に、願望的作業と非願望的作業間で、自分らしさの程度ならびに健康的な生活への影響度を比較した。義務的作業と非義務的作業間でも同様に比較した。
- 4) 両国学生間で、願望的かつ義務的作業の自分らしさの程度、ならびに健康的な生活への影響度について比較した。同様に、願望的かつ非義務的作業、義務的かつ非願望的作業についても比較した。これらより、日韓の学生の共通部分と異なる部分を確認した。
- 5) 作業を行う際の感情への回答を、その内容の類似性から類別した。そして、Plutchik (1983) の基本的情動の

分類との対応を検討し、国別かつ役割カテゴリー別に集計した。

Plutchik は、感情について、喜び - 悲しみ、受容 - 嫌悪、恐れ - 怒り、驚き - 期待のように両極的に対になった 8 つの基本感情を定義し、人間の感情を幾つかの基本感情の合成として説明している。アンケートの回答には多様な感情表現が含まれていたため、この分類は有効に利用できると考え、採用した。

6) 次に 4) の分析により、両国学生間で願望的かつ義務的作業の自分らしさが異なっていたため、特に願望的かつ義務的作業を行う際の感情について着目し、5) により類別されたデータを用いて、両国間での違いを検討した。

7) 最後に文化的背景の影響の観点から解釈を行った。

なお、1) 5) におけるデータの類別については、まず筆頭著者が行い、第 3 者が確認を行い、合意するまで修正を行った。また、韓国学生の自由回答形式の回答については、フリーの翻訳ソフトにより日本語に翻訳し、韓国語を母国語とする作業療法士が翻訳前後の韓国語と日本語の内容の整合性を確認した。統計学的分析はマンホイットニーの U 検定を用い、有意水準は 5%未満とした。

4. 倫理、個人情報の配慮について

対象者には書面と口頭にて研究目的と内容、個人情報の保護などを説明し、参加同意を得た。研究は広島大学大学院保健学研究科心身機能生活制御科学講座倫理審査委員会で承認（承認番号 1115）を得て行った。

表 1 作業と役割の組み合わせから類別された役割カテゴリー (一部)

日本学生(34名)			韓国学生(42名)		
役割カテゴリー	記述された役割	記述された作業	役割カテゴリー	記述された役割	記述された作業
学生	大学生	大学で授業を受ける	学生	学生	大学で知識を得る
	学生	授業以外も勉強する	学生	学生	試験の準備をする
	学生	レポートする	学生	学生	課題を期日までに仕上げる
	学生	自主的に勉強する	学生	学生	家で課題をする
	大学生	勉強	学生	学生	作業療法の勉強をする
家族の一員	家族の一員	家族みんなで夕ご飯を食べる	家族の一員	家族の一員	母の為に家事を手伝う
	家族の一員	家族で遊びに行く		娘	両親の援助をする
	家族の一員	姉と出かける		娘	両親に電話をする
	家族の一員	家族の話聞く		娘	両親の記念日を祝う
	娘	家事の手伝いをする		息子	両親に心配をかけないように生活する
	娘	大学であったことお母さんに話す		子供	両親に相談をする
	姉	妹の面倒を見る		兄	弟が間違ったことをしないように指導する
孫	祖父母と会話する	姉	弟の夕食を準備する		
友人	友達	他愛無いお喋りをする	友人	友人	悩みを聞いて、アドバイスする
	友人	一緒に遊ぶ		友人	一緒にご飯を食べながら、話す
	友人	休み時間を一緒に過ごす		友人	一緒に映画を見に行く
勤労者	アルバイト	接客をする	勤労者	アルバイト	生活費を稼ぐためにアルバイトをする
	アルバイト	家庭教師で教える		アルバイト	レジ打ちをする
	アルバイト	接客業でアルバイトをする		アルバイト	〇〇で働く
趣味人/愛好家	趣味人	読書をする	趣味人/愛好家	趣味人	野球を見る
	趣味人	テレビを見る		趣味人	インターネットをする
組織の一員	組織の一員	〇〇の行事に参加する	組織の一員	役員	行事を開催する
家庭生活維持者	家庭生活維持者	炊事をする	家庭生	やりくり上手	夕食を作る
			宗教信仰者	クリスチャン	子供たちに教える
			信者	教会で奉仕活動をする	
			国民	国民	投票する

表2 役割カテゴリーごとの願望的作業-非願望的作業・義務的作業-非義務的作業の内訳

日本学生(34名)から得られた106データ

役割カテゴリー	願望的作業(%)	非願望的作業(%)	義務的作業(%)	非義務的作業(%)	役割を挙げた対象者数(%)
学生	13(43.3)	17(56.7)	30(100.0)	0(0)	30(88.2)
家族の一員	25(89.3)	3(10.7)	20(71.4)	8(28.6)	19(55.9)
友人	22(100.0)	0(0)	5(22.7)	17(77.3)	18(52.9)
勤労者	9(75.0)	3(25.0)	11(91.7)	1(8.3)	11(32.4)
趣味人/愛好家	6(100.0)	0(0)	2(33.3)	4(66.7)	5(14.7)
組織の一員	4(80.0)	1(20.0)	3(60.0)	2(40.0)	3(8.8)
家庭生活維持者	2(66.7)	1(33.3)	3(100.0)	0(0)	3(8.8)
合計	81(76.4)	25(23.6)	74(69.8)	32(30.2)	-

韓国学生(42名)から得られた102データ

役割カテゴリー	願望的作業(%)	非願望的作業(%)	義務的作業(%)	非義務的作業(%)	役割を挙げた対象者数(%)
学生	14(51.9)	13(48.1)	23(85.2)	4(14.8)	26(61.9)
家族の一員	29(90.6)	3(9.4)	23(71.9)	9(28.1)	28(66.7)
友人	21(100.0)	0(0)	13(61.9)	8(38.1)	19(45.2)
勤労者	4(80.0)	1(20.0)	4(80.0)	1(20.0)	5(11.9)
趣味人/愛好家	6(100.0)	0(0)	4(66.7)	2(33.3)	5(11.9)
組織の一員	1(50.0)	1(50.0)	1(50.0)	1(50.0)	2(4.8)
家庭生活維持者	0(0)	1(100.0)	1(100.0)	0(0)	1(2.4)
宗教信仰者	6(100.0)	0(0)	4(66.7)	2(33.3)	6(14.3)
国民	1(50.0)	1(50.0)	2(100.0)	0(0)	2(4.8)
合計	82(80.4)	20(19.6)	75(73.5)	27(26.5)	-

表3 役割カテゴリーごとの願望的かつ義務的作業・願望的かつ非願望的作業・義務的かつ非願望的作業の内訳

日本学生(34名)から得られた106データ

役割カテゴリー	願望的かつ義務的作業(%)	願望的かつ非義務的作業(%)	義務的かつ非願望的作業(%)
学生	13(43.3)	0(0)	17(56.7)
家族の一員	17(60.7)	8(28.6)	3(10.7)
友人	5(22.7)	17(77.3)	0(0)
勤労者	8(66.7)	1(8.3)	3(25.0)
趣味人/愛好家	2(33.3)	4(66.7)	0(0)
組織の一員	2(40.0)	2(40.0)	1(20.0)
家庭生活維持者	2(66.7)	0(0)	1(33.3)
合計	49(46.2)	32(30.2)	25(23.6)

韓国学生(42名)から得られた102データ

役割カテゴリー	願望的かつ義務的作業(%)	願望的かつ非義務的作業(%)	義務的かつ非願望的作業(%)
学生	10(37.1)	4(14.8)	13(48.1)
家族の一員	20(62.5)	9(28.1)	3(9.4)
友人	13(61.9)	8(38.1)	0(0)
勤労者	3(60.0)	1(20.0)	1(20.0)
趣味人/愛好家	4(66.7)	2(33.3)	0(0)
組織の一員	0(0)	1(50.0)	1(50.0)
家庭生活維持者	0(0)	0(0)	1(100.0)
宗教信仰者	4(66.7)	2(33.3)	0(0)
国民	1(50.0)	0(0)	1(50.0)
合計	55(53.9)	27(26.5)	20(19.6)

※下線は類別した各作業間で最も多い%を示す

結果

1. 得られたデータの概要

表1に両国学生が記述した作業と役割の組み合わせから類別された役割カテゴリーを示す。概ねOakleyらの役割チェックリストの項目に一致したが、ボランティアのデータは無く、韓国学生のみから「教会で奉仕活動をする」という宗教信仰者、「投票をする」という国民の役割

が挙げられた。

表2に、願望的作業と非願望的作業、義務的作業と非義務的作業の内訳と両者間の%を示す。また、その役割に関する作業を挙げた対象者数と%を示す。日本学生からは106のデータが得られ、願望的作業は81、義務的作業は74であった。韓国学生からは102のデータが得られ、願望的作業は82、義務的作業は75であった。両者とも対

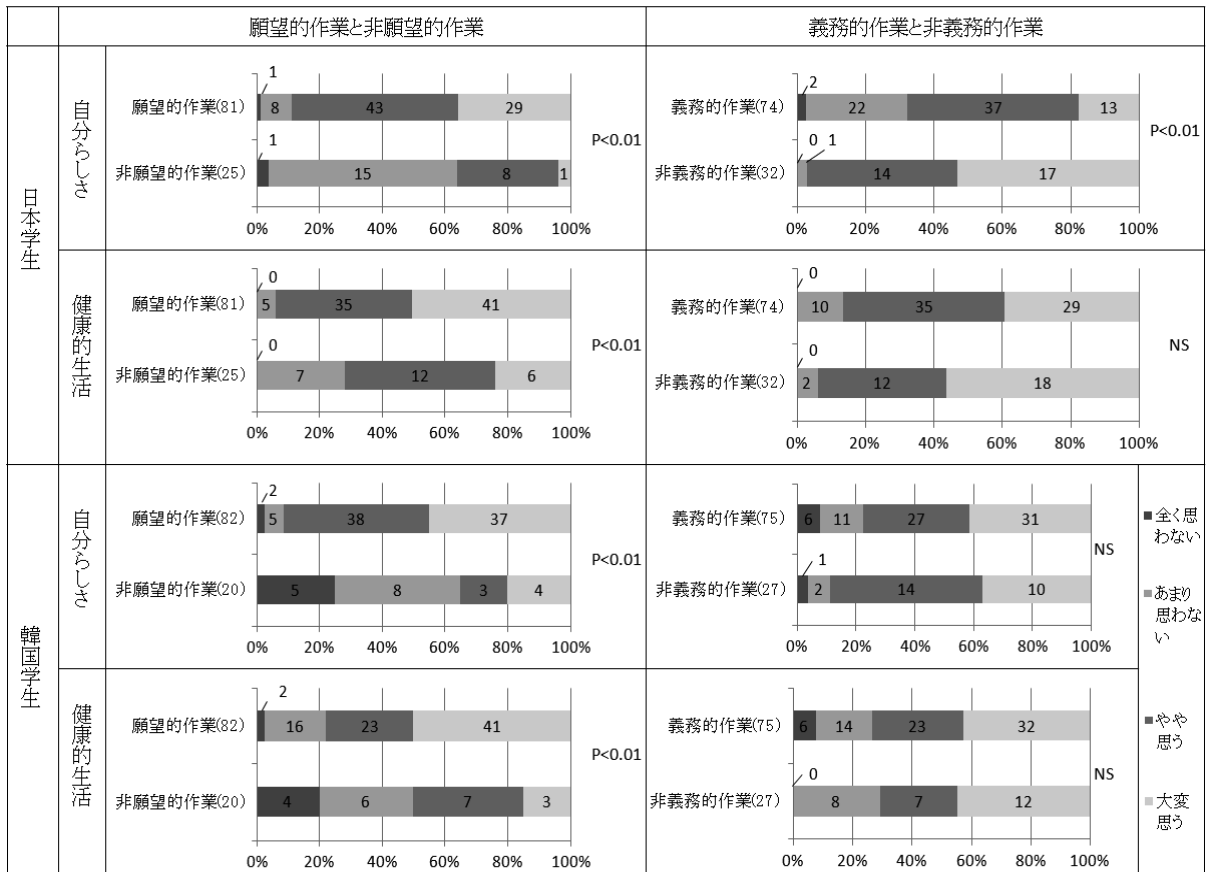


図1 願望的作業と非願望的作業間、ならびに義務的作業と非義務的作業間の自分らしさの程度、健康的な生活への影響度の比較
※数値はデータ数を示す

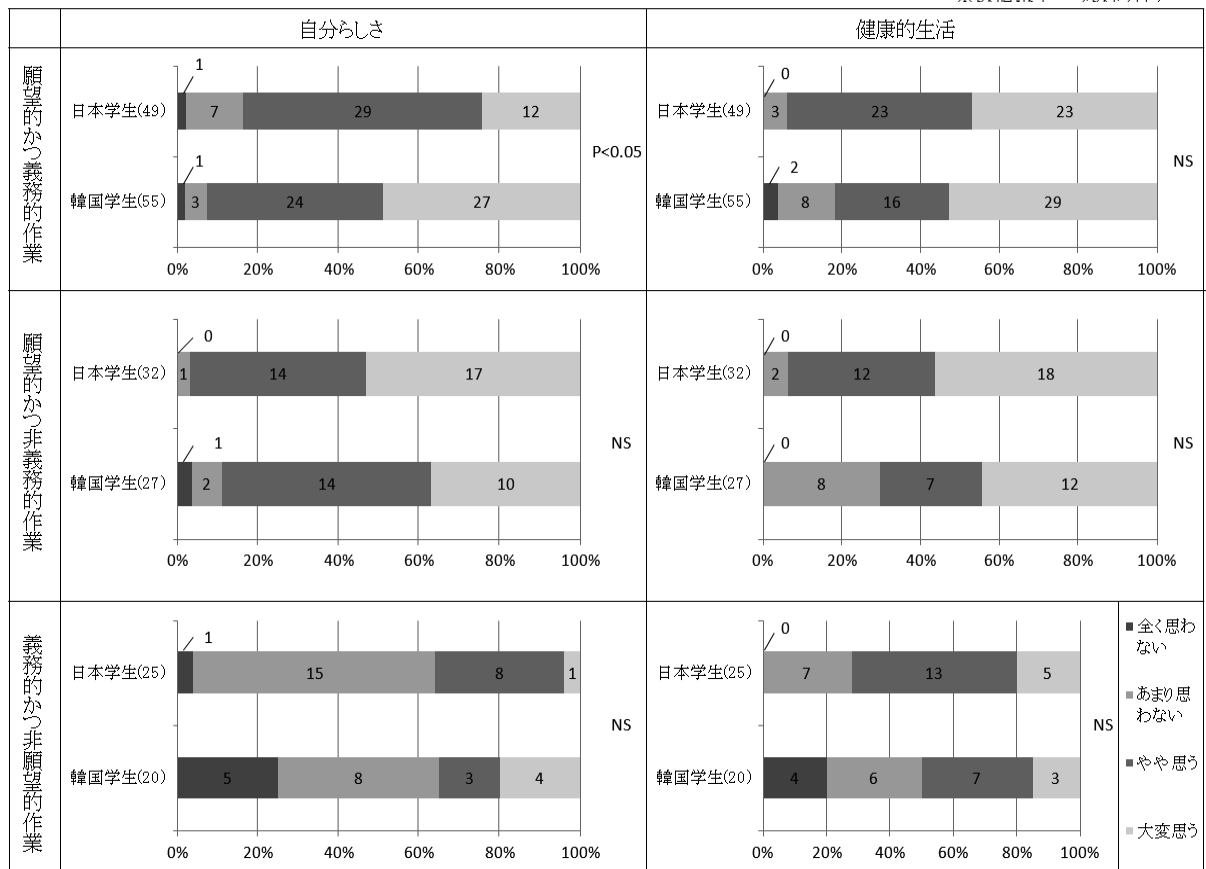


図2 両国学生間の願望的かつ義務的作業、願望的かつ非義務的作業、義務的かつ非願望的作業の自分らしさの程度、健康的な生活への影響度の比較
※数値はデータ数を示す

表 4 Plutchik の基本的情動の分類と、願望的かつ義務的作業であり、自分らしいとした感情のデータの対応

日本学生		韓国学生	
Plutchikの基本的情動の分類	記述内容	Plutchikの基本的情動の分類	記述内容
家族の一員(14)		家族の一員(18)	
喜び(5)	皆のことを知って安心する 癒される 落ち着く 感謝されて嬉しい 気分が良い	喜び(14)	母が喜ぶ姿に感謝する 一体感を感じて幸せ 幸せでいっぱい 家族と一日の話をして気持ちが良い 自分らしく過ごせる
期待(2)	親が喜んでくれると良いな 祖母が喜んでくれると良い	怒り(1)	ムカつく
嫌悪、喜び(4)	楽しいけど面倒 嫌だけれど楽しい	受容(2)	兄として弟の世話は仕方ない 家族のことなので最善を尽くすしかない
嫌悪、受容(1)	面倒だけれど、家族の為にしなければという思い	なし(1)	なし
悲しみ、受容(1)	時間を取って話せたらいいけど、すまないけど、忙しいので仕方ない		
恐れ、受容(1)	家族のことが心配だけれど、しょうがない		
日本学生		韓国学生	
学生(9)		学生(8)	
Plutchikの基本的情動の分類	記述内容	Plutchikの基本的情動の分類	記述内容
恐れ(2)	焦りを感じる 失敗するわけにはいかない	喜び(2)	出来ることへの自信を感じて、嬉しい 胸一杯で、自分が偉くなった感じ
嫌悪、喜び(2)	つらいけど、面白みもある 嫌だけれど、学ぶ喜びもある	嫌悪(4)	苦しく、疲労が大きい 難しく大変 大変で、休みたい 退屈だ
恐れ、喜び(2)	不安と喜び 焦るけど喜びも感じる	嫌悪、怒り(1)	するのが嫌い、ムカつく
嫌悪、受容(2)	嫌だけれど、学生というポジションだからやらないと やりたくないけど、やらなくなったらそれはそれで嘸だろうな	嫌悪、期待(1)	とても難しく大変だけれど、新しい何かを知っていく感じ
なし(1)	なし		
日本学生		韓国学生	
友人(5)		友人(13)	
Plutchikの基本的情動の分類	記述内容	Plutchikの基本的情動の分類	記述内容
喜び(2)	楽しい 安心する	喜び(8)	面白くて楽しい 楽しい 気分が良い
期待(1)	一緒に楽しいことをしたい	喜び、期待(1)	誰かの心強い存在になれると、うれしくて胸がいっぱい
恐れ、怒り(1)	悩みを聞いて、不安やイライラを感じる	恐れ(1)	上手くやれるかという心配
なし(1)	なし	なし(3)	なし

()はデータ数を示す

象者のほぼ半数以上から得られた役割カテゴリーは学生、家族の一員、友人であった。

表 3 に、更に詳細に、願望的かつ義務的作業、願望的かつ非義務的作業、義務的かつ非願望的作業の内訳と両者間の%を示す。日本学生のデータは、願望的かつ義務的作業は 49、願望的かつ非義務的作業は 32、義務的かつ非願望的作業は 25 であった。韓国学生のデータは、願望的かつ義務的作業は 55、願望的かつ非義務的作業は 27、義務的かつ非願望的作業は 20 であった。学生の役割をみると、両者とも義務的かつ非願望的活動をした%が最多であった。家族の一員では、両者とも願望的かつ義務的活動とした%が最多で、それぞれの作業の内訳の比率も類似していた。友人については、両国学生とも義務的かつ非願望的作業のデータは 0 であったが、日本学生の 77.3%が願望的かつ非義務的作業とした一方で、韓国学生

の 61.9%が願望的かつ義務的作業としており、両者間で%が逆転していた。

2. 願望的作業と非願望的作業間の自分らしさの程度、健康的な生活への影響度の比較

日本学生、韓国学生とも、願望的作業は非願望的作業に比べ、有意 ($p < 0.01$) に自分らしさが高いと回答し、有意 ($p < 0.01$) に健康的な生活に影響していると回答した (図 1)。

3. 義務的作業と非義務的作業間の自分らしさの程度、健康的な生活への影響度の比較

日本学生では、義務的作業は非義務的作業と比べ、有意 ($p < 0.01$) に自分らしさが低いと回答したが、健康的な生活への影響については有意な差はなかった。また、

表5 日本学生と韓国学生が挙げた願望的かつ義務的作業に伴う感情の分類

		日本学生		韓国学生	
		自分らしい(%)	小計(%)	自分らしい(%)	小計(%)
肯定的感情	喜び	14(34.1)		33(64.7)	1(25.0)
	期待	3(7.3)			
	喜び-期待			1(2.0)	
		17(41.5)	0(0)	34(66.7)	1(25.0)
否定的感情	嫌悪		1(12.5)	4(7.8)	1(25.0)
	恐れ	2(4.9)		1(2.0)	
	怒り			1(2.0)	
	嫌悪-怒り			1(2.0)	
	嫌悪-恐れ		1(12.5)		
	恐れ-怒り	1(2.4)			
		3(7.3)	2(25.0)	7(13.7)	1(25.0)
肯定的感情 かつ 否定的感情	嫌悪-喜び	11(26.8)	3(37.5)	2(3.9)	1(25.0)
	嫌悪-期待			1(2.0)	
	恐れ-喜び	2(4.9)			
		13(31.7)	3(37.5)	3(5.9)	1(25.0)
受容	受容		2(25.0)	2(3.9)	
		0(0)	2(25.0)	2(3.9)	0(0)
否定的感情 かつ 受容	嫌悪-受容	4(9.8)	1(12.5)		
	悲しみ-受容	1(2.4)			
	恐れ-受容	1(2.4)			
		6(14.6)	1(12.5)	0(0)	0(0)
その他	なし	2(4.9)		5(9.8)	
	類別できず				1(25.0)
		2(4.9)	0(0)	5(9.8)	1(25.0)
合計		41(100)	8(100)	51(100)	4(100)

韓国学生では、いずれも有意な差はなかった(図1)。

4. 両国学生間の自分らしさの程度と健康的な生活への影響度の比較

両国学生間で、願望的かつ義務的作業の自分らしさの程度について比較したところ、韓国学生は日本学生に比べて、有意($p < 0.05$)に自分らしさが高いと回答した。健康的な生活への影響度については両国学生間で有意な差はなかった(図2)。

願望的かつ非義務的作業ならびに義務的かつ非願望的作業の自分らしさの程度と健康的な生活への影響度について両国学生間で比較したところ、いずれも有意な差はなかった(図2)。

5. 義務的作業における日本学生と韓国学生の感情について

「作業が引き起こす感情」への回答内容を類別して、Plutchikの基本的情動の分類との対応を検討し、国別、役割カテゴリー別に集計した。前述した分析において、両国学生間で願望的かつ義務的作業の自分らしさが異なっていたため、ここでは、その一部として、表4に願望的

かつ義務的作業であり、自分らしいと回答した感情のデータを示す。また、表5にPlutchikの基本的情動の分類により、願望的かつ義務的作業における感情のデータを類別し、集計した表を示す。自分らしさの程度を4件法で尋ねたため、ここでは「大変そう思う」「ややそう思う」を‘自分らしい’そして「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を‘自分らしくない’として集計した。日本学生では自分らしい作業に抱く感情の41.5%が肯定的感情であり、韓国学生では66.7%であった。つまり、両国学生とも、願望的かつ義務的作業であり、自分らしいと感じる作業については、肯定的感情を伴うことが多い傾向があった。

両国学生間で異なったことは、日本学生では、自分らしい作業における嫌悪-喜び、嫌悪-期待、恐れ-喜びといった肯定的感情と否定的感情の混在が31.7%に及んだが、韓国学生では5.9%のみであった。また、嫌悪-受容、悲しみ-受容、恐れ-受容という否定的感情と受容の組み合わせは日本学生のみに見られた。そして韓国学生で、特徴的であったことは、願望的かつ義務的作業で自分らしいとした作業に伴う感情として、喜びが大半の66.7%を占めたことである。なお、類別できなかったデータは「何

とも言えない気持ち」であった。

考察

1. 両国学生の共通性—願望的作業の自分らしさ、健康的な生活への影響度

両国学生から、願望的作業は非願望的作業に比べ、有意に自分らしいと感じ、健康的な生活に影響するという結果が得られた。ただし、この分析では、願望的作業に、願望的かつ義務的作業、願望的かつ非義務的作業の両者が含まれている。そのため、解釈に留意が必要ではあるが、願望という観点では、人がやりたい作業に関する自分らしさの認識や、その健康的な生活への影響への認識には、共通性があることを示した可能性があると考えた。

2. 両国学生の相違—願望的かつ義務的作業の自分らしさについて

両国学生間で、願望的かつ義務的作業の自分らしさについて比較すると、韓国学生は日本学生よりも有意に自分らしさを感じていることが示された。

個人の作業の選択と実行には、内面からの動機付けと環境からの要請を受けていると考えるが、その両者のバランスの認識により、その作業を願望的作業と捉えるか、義務的作業と捉えるかが影響されると考えられる。即ち、願望的かつ義務的作業とは、内面からの動機づけを認め、かつ環境からの要請を認めている作業であると考えられる。その自分らしさが、両国学生間で異なっていたことは、両者の間で内面からの動機づけと環境からの要請に折り合いをつけるプロセスに差異があったのではないかと考えた。

感情について見てみると、日本学生は韓国学生に比べ、自分らしいとした願望的かつ義務的作業であっても、肯定的感情と否定的感情を同時に述べていることが多く、さらに否定的感情と受容の組み合わせを特徴的に述べた。Heard (1977) は、役割に関する意思決定から役割遂行までのプロセスを示す役割獲得モデルの中で、役割は内的期待（価値、関心、技能、自己有能感）と外的期待（社会からのノルマや要望）の両者から入力され、不確かさ、衝突を経て意思決定がなされ、作業役割が実行されることを示している。日本学生における、否定的感情と肯定的感情の混在や、否定的感情と受容の組合せは、このモデルにおける不確かさ、衝突を示していると考えられた。

一方、韓国学生は、願望的かつ義務的作業であり自分らしさを感じる作業の多くに喜びを感じており(64.7%)、「家族と悩みを分かち合い、話をする」作業に対して「一体感を感じて幸せ」を、「母親と夕食の準備をする」作業

に対して「母の喜ぶ姿に感謝する」を、そして「友人の大変なことがあれば話を聞き何かしてあげる」作業に対して「誰かにとって心強い存在になれると、うれしくて胸がいっぱい」という感情を述べている(表4)。

これらより、日本学生では願望的かつ義務的作業は、環境からの要請と内的欲求の競合を意味していたため、自分らしさを感じにくく、多面的な感情を伴っていたと考えられたが、韓国学生では、願望的かつ義務的作業は、環境において自己の役割を認め、自身の有能性を発揮することを意味しており、自分らしさや、喜びの感情を伴っていたと考えられた。

3. 文化の観点からの説明の試み

日本と韓国の文化的な違いについては、他の学問領域から様々な書籍が出版されており、同じアジアに属し、隣国であることから同質性が、島と大陸という地理的な、そして歴史的の違いから異質性が述べられている。

野中(2012)は、日本文化について、形式と内容という観点から、型ができあがってから自分を表現する特性について述べている。本研究においては、この形式・型は、役割にあたり、役割という形式・型があった上で、それに伴う作業を否定的感情や肯定的感情を感じながらも行い、自分らしさを模索し、多くの場合は実行する上で受容して収めている、と解釈できると考えた。

また、日本人の特性を述べる際によく用いられるキーワードに「集団主義」「内と外」「縦社会」「恥の文化」「甘え」などがあるが、これらは、環境からの影響を受け入れた上で、自己（あるいは自己の所属する集団）の意志や利益を保とうとした結果、生じた対処様式と捉えることができる。日本学生が受容という感情として述べた内容に「仕方がない」「しょうがない」という特徴的な言葉があった。これは、自身の状況や環境からの影響を、粛々と受け入れる際の言葉であり、願望的かつ義務的作業とはするものの、自分らしさという観点では、韓国学生よりは肯定的では無かったと考えた。

一方の韓国学生は、自身の願望的かつ義務的作業について、自分らしさを認め、喜びという肯定的感情を多く示した。金(1994)は、韓国語の「トクトク」という日本語の賢いに 当たる言葉について「自分の意見をはっきり述べ、自分の信じることを突き抜けて進んでいくこと」と説明し、韓国人の賢さの概念が日本のもの（自分の身を縮めながら、エネルギーを自分の組織に献身するという賢さ）とは異なると述べている。また、韓国学生は家族の一員の役割について「喜び」という感情を多く示し、友人の役割に伴う作業を願望的かつ義務的作業

と見なして、他者を積極的に支援したいとしており、韓国の道徳に影響の強い儒教の5倫5条（朋友の信、長幼の序など）の教えの影響が伺えた。このように、社会における規範となる考えや他者との関係における道徳観が、家族や友人に対して何かをしたいという願望と一致しやすい文化背景があったことが、願望的かつ義務的作業への自分らしさや、それに伴う感情に影響したと考えられた。

また、韓国学生のみから宗教信仰者と国民という役割が挙げられたことは、仏教徒と2分するほどキリスト教徒が多いことや、大統領選挙を控えていたことなど、外面としての文化からの影響も伺えた。

4. 作業療法への提言

本研究において、文化背景の異なる対象者によって、自身の役割に伴う作業に対して、願望的作業であるのか、義務的作業であるのかという認識や、それに伴う感情や自分らしさという個人的な意味付けにおいて違いがあることが示唆され、特に、願望的かつ義務的作業において影響する可能性が示唆された。

本研究では、日本学生と韓国学生を対象としたが、同じ国民であっても、年齢層や、地域、所属集団によって、形づけられる信念と認識、価値と基準、慣習と行動、つまり文化が異なり、その役割の認識や感情に差異があることも予想される。そのため、作業療法士はクライアントの作業への文化の影響について丁寧に扱っていく必要があると考える。

5. 研究の限界

両国の大学から対象者を得ているため、それぞれの大学の特色が影響を及ぼしている可能性がある。つまり両国間の文化に加え、大学という特定集団の文化が重なった上での結果である可能性が高い。また、本研究では主に作業の意味の観点から分析をしており、役割ごとの分析がデータ数の違いのために、十分に行えていない。そして、アンケート調査において、それぞれの言語を母国語とする作業療法士が説明し、内容について確認したが、データ収集の説明に用いた各国の言語に由来するニュアンスの違いが結果に影響した可能性がある。

文献

- American Occupational Therapy Association (2002). Occupational Therapy Practice Framework: Domain and Process. *American Journal of Occupational Therapy*, 56, 609-639.
- Clark, F., Parham, D., Carlson, M.F., Frank, M., Jackson, J., Pierce, D., Wolfe, R.J. & Zemke, R. (1991). Occupational science: Academic innovation in the service of Occupational therapy's future. *American Journal of Occupational Therapy*, 45, 300-310.
- Tylor, E.B. (2010). *Primitive culture: researches into the development of mythology, philosophy, religion, art and custom*. Cambridge University Press, Cambridge. pp.1-25.
- Heard, C. (1977). Occupational role acquisition: a perspective on the chronically disabled. *American Journal of Occupational Therapy*, 31, 243-247.
- 中村 Thomas 裕美, 菊池恵美子, 山田孝 (2000). 作業療法における作業活動の選択と興味に関する研究. *The Journal of Japan Academy of Health Sciences*, 7, 208-217.
- Kielhofner, G. (山田孝・監訳) (2012). *人間作業モデル 理論と応用 改訂第4版*. 協同医書出版社, p.39.
- 金容雲 (1994). 韓国「土」思想の歴史的考察. 在日本韓国文化院・編, *日韓文化論 日韓文化の同質性と異質性*. 学生社, p110.
- Kondo, T. (2004). Cultural tensions in occupational therapy practice: Considerations from a Japanese vantage point. *American Journal of Occupational Therapy*, 58, 174-184.
- 野中猛 (2012). 日本文化と作業療法. *作業療法ジャーナル*, 46, 1250-1254.
- Oakley, F., Kielhofer, G. & Reichler, R.K. (1986). The role checklist; development and empirical assessment of reliability. *Occupational Therapy Journal of Research*, 6, 157-170.
- Pultchik, R. & Kellerman, H. (1983). *EMOTION theory, research, and experience*. Academic Press, New York. pp.338-347.
- 吉川ひろみ (2009). 作業の意味を考えるための枠組みの開発. *作業科学研究*, 3, 20-28.
- 吉川ひろみ, 宮前珠子, 水流聡子, 石橋陽子, 近藤敏 (2000). 作業療法における役割概念. *作業療法*, 19, 305-314.

【原稿受理：2014年4月8日】